

商務印書館の日本人投資者

樽本照雄

表題の商務印書館には、「初期」とつけてもいい。しかし、そうはしない。

日本人が商務印書館に投資していたのは、1903年から1914年までの期間である。別の表現をすれば、商務印書館と金港堂の合併時期に重なる。1897年の創設だから、「初期」で間違いはない。現存する商務印書館について、「中期」とか「後期」を設定するのは無理としても、創業から1914までを「初期」と称することはかまわない。本稿で「初期」を使用しないのは、わざわざ特定しなくてもわかるからだ。

辛亥革命をへて中華民国が成立すると、外国企業である金港堂との合併会社ではいられなくなった。日本人の持株を回収して合併を解消することにする。交渉を重ね合併解約にこぎつけるや、商務印書館は、純粹中国資本であることを大いに宣伝した。それ以後は日本人の投資を考慮することもない。時期が限定できるから、わざわざ「初期」とかぶせる必要もないという理由である。

つぎのごく簡単な説明は、大筋であって常識の範囲内だろう。すなわち、1903年、金港堂と商務印書館は、双方平等に10万元を出しあい正式に合併会社となった。実質約10年間の日中合併を解消して日本人株を完全に買収しおわたのが1914年のことだ。その時の日本人の持株は3,781株だった。

これくらいのことは、どこにも書いてある。だが、日本人投資者にはどういう人物がいて、各人が何株を所有していたのか、というより深い部分になると話が違ってくる。

日本人投資についての情報は、商務印書館の内部文書にしか存在しない種類のものだ。もとの資料そのものは、これまで公表されたことはない。だが、具体的な人名とその持ち株数はわかっている。論文というかたちで発表されているからだ。

まず、その論文を紹介することからはじめよう。(以下、汪家熔論文と稲岡勝論文についてのべる。手っ取り早く今回の調査を知りたいばあいは「3樽本の追加説明」へどうぞ)

1 汪家熔論文

日本人投資者たちの名前を最初に公表したのは、汪家熔である。商務印書館の内部文書を見なければ書けるはずもない。商務印書館に勤務していたからできたことだ。ただし、彼の前にも資料を見た人はいたに違いないが、それを公表したことはない。商務印書館が日本の金港堂と合弁会社であったという事実を明らかにすることのできない時期が続いたからだろう。1990年代になって、ようやく公開が許されたと考えられる。いずれにしても汪家熔の功績である。

汪家熔は関連論文3本を書いた。それらは、創業時期の株主たちについて紹介するものだ。その中の1本は、日本人株主を特に抜き出して論じる。だから、内容から見れば主として2種類に分けることができる。それらは、最初、雑誌に掲載され、のちに自著などの単行本に収録されている。その過程で部分的に訂正増補を加えているから、まったくの同一文章だというわけではない。それぞれの論文に、便宜上、A1、A2、A3を、内容が類似するからaを、日本人株の専論だからB1、B2のように記号と番号をふる。番号の1は、初出を示し、それ以外は後の収録を表わす。

A1:「商務印書館創業諸君」『江蘇出版史志』総第7期1991.10

表題通り商務印書館を創業した人々について書かれた論文である。以下の単行本に収録された。

A2: 汪家熔著『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10

A3: 宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10

創業した人々といっても、日本との合弁をへて日本人株回収までを記述の対象とする。創業時期の人々と考えればいいだろう。私は、本稿において日本人投資者に注目する。それ以外は簡単に紹介するにとどめたい。

第1章では、高翰卿の1917年と1934年の2回にわたる回顧にもとづいて、創業当時の出資者とその金額を明らかにする。出資金の合計は3,750元だ。ただし、出資者は7人なのか8人なのか、出資者のひとりである高翰卿自身の発言が異なっている。問題が存在していることだけを、再度、指摘しておく*1。

第2章は、鮑哲才牧師一家に関してのものだ。彼らは、商務印書館を創業した夏瑞芳らの中心人物たちと姻戚関係であった。なるほど、商務印書館のもともとの指導者たちは、キリスト教の信仰と姻戚で固められたグループだ、と容易に理解できる。文字通りの家内工業であった。ついでに言えば、夏瑞芳の家族写真がある。夫人（鮑哲才次女鈺）とともに9名の子供が写っている（樽本『初期商務印書館研究（増補版）』清末小説研究会2004.5.1に収録しておいた）。信仰に篤い夫妻だった。

第3章は、第1次増資をあつかう。1901年の夏、張元済と印錫璋が2万3,750元を投資し、資本金を5万元とした。印錫璋は、紡織会社を経営していた関係で三井物産の山本条太郎と知り合いだ。印錫璋は、この投資によって商務印書館の株主になったというわけ。これが、金港堂と合併する下地となったのである。金港堂社主の原亮三郎は、山本の岳父だ。

汪家焯は、この部分に典拠があることを示す。「参関樽本照雄：《商務印書館与山本条太郎》、《清末小説》第2輯」だと書いている。だが、掲載誌を『清末小説』とするのは汪家焯の勘違い。

1970年代のことだ。私は、商務印書館と金港堂の合併問題を調査していた。その結果を「金港堂・商務印書館・繡像小説」（『清末小説研究』第3号1979.12.1。のち『清末小説閑談』所収）と題して発表した。さらに、両社の合併にかかわって山本条太郎と印錫璋の関係があることを書いた。それが、「商務印書館と山本条太郎」（『大阪経大論集』第147号1982.5.15。のち『清末小説論集』所収）である。そこまでは、なんとか判明した。しかし、それ以上の資料が出てこない。金港堂との合併資料が保存されていないか、と北京の商務印書館あてに問い合わせの手紙を書いた動機である。それに添えた論文のひとつが上述の「商務印書館と山本条太郎」だ。しばらくして商務印書館総編室名義で返答があった。「わが館の早期保存資料は、1932、1937年の淞滬抗戦期にすべてを失ってしまい、ゆえに提供しようにも方法がありません」と書かれている。返答をよこした人物の真意は、私には十分すぎるほど理解ができた。

さらに数年が経過した。無視されたとばかりに思っていた私の「商務印書館と山

本条太郎」だったが、意外なところで翻訳されていることを知った。[日]樽本照雄著、東爾訳「商務印書館与山本条太郎」(『商務印書館館史資料』之四十三 北京・商務印書館総編室編印1989.3.20)である。『商務印書館館史資料』は、商務の内部刊行物であって日本で見ることなどではしれない。汪家熔は、この漢訳を読んだのだろう。注記するさいに『大阪経大論集』と『清末小説研究』第3号を取り違えたものと考えられる。

第4章が「中日合資」だ。金港堂との合弁であるというのは、正確ではない、と冒頭にのべる。原亮三郎が中心となった日本人との合弁だという。今まで、商務印書館と金港堂の合弁だ、といいならわしていた。また、当事者である高翰卿は、その回憶録「本館創業史」において、山本条太郎と金港堂の名称だけをあげて原亮三郎の名前はない。あくまでも金港堂が中心である。汪家熔がいうのは、原亮三郎の個人投資だという意味だろうが、これは中国では見ることでできなかった説明だ。

それはそのはずで、私が「金港堂・商務印書館・繡像小説」の中で「正式な合弁とはいえ、企業間の合弁ではなく個人の投資」(111頁)だと書いたのを根拠にしている。私の記述は、原安三郎から直接に証言を得てそれにもとづいたものだった。

以上のように、汪家熔は、日本語の先行文献をもとにして原亮三郎、三宅米吉、教科書疑獄事件、山本条太郎、加藤駒二、小谷重らについて解説する。

論文を利用するのは、別にかまわない。ただし、日本語文献をそのまま引用して、はたして理解しているかどうかわからない箇所がある。たとえば、小谷重について「金港堂正七位編輯主任」(A1:68頁)と書く。また、「長尾是從六位教授」(同上)という表現をする。後者に続けて「小谷の職稱よりも高い[比小谷の職稱高]」と説明する。これでは意味が不明だと考えたのか、のちに記述を変更した。つまり、前者は、「金港堂“正七位”編輯主任」(A2:15頁、A3:120頁)に、後者は「長尾是“從六位”教授」(同上)のように引用符を使用するのだ。汪家熔は、それらが金港堂内部における「職稱」だと考えたらしい。私は、新聞に報道されたとおりに、「高等師範学校教授從六位長尾楨太郎(号雨山)」、「金港堂編輯主任正七位小谷重」と書いている。「從六位」「正七位」とは、いうまでもなく官位であって金港堂とは関係がない。小谷は文部省に勤務していたし、長尾は高等師範学校教授だったから官位がついているだけのことだ。

もうひとつある。日本人ふたりの貢献度と彼らの「職稱」について、汪家熔は、同じページで次のように説明する。「小谷と長尾は、商務が合弁したあとに編集し

た『最新教科書』について一定の貢献をした。しかし、その貢献は、日本の学者が信じているような長尾が自分でのべているほどに大きいものでは決してなかった。長尾は従六位の教授で小谷の職称よりも高いため、『最新教科書』の表紙でも長尾が前にいる」

汪家熔は、長尾があたかも教科書編集について述べているかのように説明している。だが、長尾雨山は、自分が編集に参加した『最新国文教科書』について、何かを語ったという事実はない。汪家熔は、勘違いをしている。これが間違いのひとつ。

長尾の教科書編集についての貢献度は、たいしたものではなかった、という。本当にそうなのだろうか。こういうばあい、日本の学者の「思いこみ」をただ単に批判するだけでは、汪家熔の書き方は感情的だといわれてもしかたがなかるう。そうではなく、具体的に編集の内容にわたって説明しなければ、批判にはならない。これが間違いのふたつ目。

みっつ目の間違いは、『最新国文教科書』を見れば簡単にわかる。すなわち、その表紙には校訂者として、日本前文部省図書審査官小谷重、日本前高等師範学校教授長尾楨太郎、福建長楽高鳳謙、浙江海塩張元済の順で名前があげられている。小谷の名前が長尾の前に置かれているのは誰の目にもあきらかだ。ということで、汪家熔の書いているのは正しくない。この順位は、教科書そのもののほかにも見ることができる。『東方雑誌』創刊号(1904.3.11)の広告「最新初等小学教科書出版」だ。そのまま書き抜いておく。「日本文部省図書審査官兼視学官小谷重君高等師範学校教授長尾楨太郎君及曾從事中国学堂之福建高君鳳謙浙江張君元済」

順位もさることながら、これを見れば商務印書館の意図を鮮明に理解することができる。すなわち、小谷、長尾、高鳳謙、張元済らを教科書編纂のために特に招聘したことを強調してあますところがない。

『最新国文教科書』の編集校訂に小谷、長尾らが大いに貢献したことは、商務印書館自身が認めて広告している。汪家熔は、この事実を無視したいらしい。日本人の貢献を無視したいのならそれでもかまわない。そうならば、同じ広告、あるいは教科書の表紙に見える高鳳謙、張元済らの貢献も同様に無視することになるのが理解できないのだろうか。日本人は無視して高鳳謙、張元済は評価するというのであれば、なにをかいわんや。

それよりも、私が注目するのは、1905年旧暦二月に2度の増資をしたという事実のほうである。それまで、そのような事があったとは知られていない。しかも、日

本人投資者の名前が具体的に挙がっているところが新しい。

2度の増資のうち前のほうで投資した日本人は、原亮一郎、山口俊太郎^{ママ}、利見合名会社、篠崎都香佐、益田太郎^{ママ}、益田タタ^{ママ}、藤瀬政次郎、鈴木島吉、神崎正助、丹羽義次、伊地知虎彦だ。後で投資したのは長尾(雨山)のほか、田辺輝雄、小平元、木本勝太郎、原田民治だという。汪家熔は、「全部で19名」だと書いているのだが、ここに見えるのは16名(うちひとつは会社名)でしかない。日本側理事の名前に原亮三郎と加藤駒二をあげているのを数えれば18名で、それでもひとり不足する。「益田タタ」という日本人名は、たぶん存在しない。カタカナを表記できずに漢字の「タ」で代用したとわかる。それにしても「タタ」はないだろう。推測できるのは「タマ」か。

珍しい資料ということができる。私は、すぐさま『清末小説から』第26号(1992.7.1)において、汪家熔論文の該当部分を紹介したくらいだ。

原田民治については、汪家熔が解説している。原田は金港堂とは関係がないらしい。1898年の戊戌前には中国に来ていて、羅振玉らの経営する東文学社、農学会が発行していた『農学報』『教育世界』雑誌の要請で日本語教育と翻訳に従事していたという。王国維は原田に日本語を学んだ。もうひとりの小平元は、紙購入の責任者だった。中国側から尊重され、日本資本が引き揚げたあとも彼は引き続き奉職した。後に自分で仕事をはじめてようやく商務を離れたという(A1:68頁、A2:15頁、A3:120-121頁)。

原田と小平の両名以外には、汪家熔は説明を加えてはいない。

続けて1902年に設立された編訳所に勤務した人々に言及する。高夢旦、蔣維喬、伍光建、孟森、夏曾佑、杜亜泉らである。

第5章は、日本資本の回収についてのべる。ここでは触れない。

この「商務印書館創業諸君」とほぼ同じ内容の、題名が異なる論文がある。

a: 長洲「商務印書館的早期股東」『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1

著者の「長洲」は、汪家熔の筆名であろう(のち、本人に確認した)。私がそうだと判断する理由は、簡単だ。論文の内容が、先のA1-A3「商務印書館創業諸君」と基本的に同じなのである。

部分的に省略しながら、比較的大きな違いもある。たとえば、高夢旦、蔣維喬、

伍光建、孟森、夏曾佑、杜亜泉らを差し替えて、嚴復、謝洪賚、艾墨樵、沈知方、沈季方、高鳳崗、張廷桂、李恒春らについて説明している箇所がそうだ。

私が注目する日本人投資者についても、すこしばかり変更がある。

先には「1905年農曆2月」と書いていたのを「1905年2月」と変更する。これでは新暦2月と間違うではないか。

日本人投資者の氏名に出入りがある。変更部分を【】(書き換え)、×(削除)で示す。

原亮一郎、山口俊太郎【郎】、利見合名会社、篠崎都香佐、益田太郎【郎】、益田タタ【玉】、【田辺輝雄】、藤瀬政次郎、鈴木島吉、神崎正助、丹羽義次、伊地知虎彦

長尾(雨山)、×田辺輝雄、小平元、木本勝太郎、原田民治

前出「即」だったのを「郎」と正しく表示し、益田「タタ」を「玉」に変更する。「2月下旬」の増資時に参加したはずの田辺輝雄を前に移動した(a:650頁)。

「玉」はいいにしても、田辺については、投資の時期が違って来る。なぜそうなるのか、理由を説明しない。書類の整理がうまくいっていないのだろうか。

a 長洲「商務印書館の早期股東」は、私の知る限り別の単行本には再録されていない。田辺輝雄に関しての変更は、疑問符をつけるほかしかたがないだろう。

前述したように、商務印書館への投資者のうち日本人株主を抜き出したのが次の論文だ。

B1:「商務印書館日人投資時的日本股東」『編輯学刊』1994年第5期(総第37期)
1994.10.25

この論文もA2と同様に汪家熔の著作に収録されている。

B2:前出『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』

汪家熔は、該論文において1914年時点での日本人投資者名簿を掲げた。これこそが、注目に値する新しい資料なのだ。

商務印書館が金港堂との合弁を解消するためには、日本人の持ち株を買収しなければならない。そこで作成された資料だとわかる。詳細な一覧表には、17の番号をふってそれぞれの氏名(名称)と持ち株をまとめている。各人の持ち株がいくらだ

ったのか、以前には公表されたことなどない。まさに、画期的であった。

この名簿にあがった人名について、1996年、稲岡勝がその所属肩書きを注記した。それをまた、1998年に汪家熔がそのまま自分の著作に収録する、という経過で現在にいたっている。私も、稲岡の成果を引用したことがある。

汪家熔が提出したのはどのような名簿だったのか、下に示して見てもらうことにしよう。ただし、持ち株を1株=100円で評価した金額まで記入するのはわずらわしいので省略している。「」で示した箇所は、汪家熔が各人について説明していることを私なりに要約したものだ。

序次	執股人姓名	入股数	
1	木本勝太郎	135股	日籍職工
2	長尾楨太郎	45股	日籍職工
3	篠崎都香佐	88股	
4	小平 元	60股	日籍職工
5	原田 民治	13股	日籍職工
6	神崎 正助	30股	
7	尾中満吾(華南記)	22股	
8	原 亮一郎	515股	原亮三郎の長男。金港堂社長。最初の投資者
9	原 亮三郎	1,055股	金港堂書店の創業者。最初の投資者
10	山本条太郎	764股	^{ママ} 山井洋行上海支店長。原亮三郎三女の婿。最初の投資者
11	丹羽 義次	45股	
12	鈴木 島吉	80股	
13	伊地知虎彦	15股	
14	益田 太郎	329股	加藤駒二から株譲渡?
15	益田 タマ	167股	加藤駒二から株譲渡? B2:33頁,34頁では「タタ」
16	山口俊太郎	383股	
17	利見合名会社	35股	
	共 計	3,781股	

以前、汪家熔は、1905年旧暦二月に2度の増資をした、と書いていた。ところが、

この論文では、上記 1、2、4、5 番の日本籍職員は、「光緒三十一年（1905）十二月二十二日」の株主会議で職員のなかで特別に尽力したものに株の取得を許す、というので投資したと説明する（B1:91頁、B2:32頁）。旧暦二月ではない。おまけに、「光緒三十一年（1905）十二月二十二日」は、新暦では1906年1月16日だ。旧暦二月に2度増資をし、さらに十二月以降にも増資したという意味なのだろうか。汪家燊の記述がゆれている、あるいは説明が不足しているといわざるをえない。

名簿には見えない人物について汪家燊は、次のように指摘する。

加藤駒二は、日本側理事のひとりだった。商務の規則によれば株主でなければならないが、最終的な株主のなかに名前がない。

「査賬董事」田辺輝雄は、その肩書きを日本語に翻訳すれば監査役理事ということになるか。彼の名前も名簿にない。

益田タマは、後のB2で「タタ」にもどしている。これも汪家燊の記述のゆれである。

原田民治については、前稿では、商務印書館とは無関係であると説明していた。ところが、13株を所有している事実をふまえて考えを変えたい。すなわち、「日籍職工」と表現する理由だ。汪家燊は、自説について訂正の説明をしない主義だとみえる。

考えてみれば、商務印書館の株を所有することは、商務とのかかわりがあるかないかとは無関係ではなからうか。しいていえば山本条太郎、あるいは原亮三郎と人的つながりがあれば、それだけで株を所有する理由としては十分な気がする。

2 稲岡勝論文

稲岡勝は、「日中合弁事業の先駆、金港堂と商務印書館の合併1903-1914年」（東京都立中央図書館報『ひびや』第145号1996.3）において、汪家燊の提示した名簿（B1所収）に各人の所属、肩書きをつけ加えた（30頁）。もとの論文では番号は省略しているが、閲覧に便利なように付けて示す。

	株主氏名	持株数	備考（肩書、所属など）
1	木本勝太郎	135	商務印書館（印刷）、元金港堂
2	長尾楨太郎	45	同 編訳人、元高等師範教授

3	篠崎都香佐	88	篠崎医院院長（在上海）
4	小平 元	60	商務印書館（印刷）、元金港堂
5	原田 民治	13	不詳
6	神崎 正助	30	三井物産
7	尾中 満吾	22	不詳
8	原 亮一郎	515	金港堂社長。原亮三郎の長男
9	原 亮三郎	1,055	金港堂創業者
10	山本条太郎	764	三井物産。原亮三郎の女婿
11	丹羽 義次	45	三井物産？（山本条太郎部下）
12	鈴木 島吉	80	正金銀行上海支店
13	伊地知虎彦	15	三井物産（山本条太郎部下）
14	益田 太郎	329	不詳
15	益田 タマ	167	不詳
16	山口俊太郎	383	実業家。原亮三郎の女婿
17	利見合名会社	35	大阪で教具の製造販売
	計	3,781	

原田民治についての汪家熔A1あるいはB1の説明は、無視されて「不詳」になってしまった。それ以外は、よく調査された記述だ、と私は今でもそう思う。当時、上海に滞在していたであろう日本人について調べることは、それほど簡単なことではない。だからこそ、汪家熔はB2において、全面的に稲岡の調査を受け入れた。ゆえに、不思議なことながら、汪論文では、原田民治も「不詳」になっている。

ついでにいえば、後のB2では「2長尾真^{ママ}太郎」、「15益田タ^{ママ}タ」とかえて間違っているのは、単なる誤植なのだろうか。

日本側投資者の肩書きを見れば、そのほとんどが金港堂と三井物産の関係者で占められていることがわかる。原亮三郎と山本条太郎の姻戚関係を知っていれば、金港堂関係者が中心となり三井物産の人間をまきこんだ日中合弁という事実にはちがいない。

3 樽本の追加説明

汪家熔、稲岡勝両氏の調査を尊重しながら、私の調査結果を報告する。ほとんどの人物については、記録の断片を寄せ集める結果となった。先行文献と重複する、あるいは調査が十分ではない部分がある。了解してほしい。

1 木本勝太郎

金港堂（書籍株式会社）勤務。『少女界』創刊号（1902.4.11）の発行人にその名前が見える。上海へ渡って商務印書館技師長となる。給料は180元だった〔朱蔚伯1981:147〕。1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前がある〔東亜1988:472〕、『張元濟年譜』には、1908年7月2日に長尾楨太郎と一緒に名前がでてる。もう1カ所、1930年7月30日にもある。こちらには注がついて、上海印刷有限公司を開設、小平元も同社の社員と説明する〔張樹年1991:342〕。小平元のところでも触れる上海印刷株式会社のことだ。木本が先に社長であり、それを継いだのが小平かと考える。

木本と小平のふたりは、『張元濟日記』に並記されて登場することがある。木本は印刷を、小平は印刷用紙の買い付けを担当していた。印刷と用紙だから、印刷所にとってはどちらも欠かすことができない。

商務印書館と金港堂が約10年間にわたる合併を解消したのは1914年1月のことだった。日本人職員はただちに解雇されたかということ、そうではない。木本と小平については、商務側が強く引き留めた。

1916年になっても商務印書館で働いている事実がある。張元濟の記録によると、同年2月26日、色彩石印判について木本が発言している〔張元濟2001:25〕。11月6日の記録には、張元濟、高翰卿、鮑咸昌の3人がかりで夕食をともしながら木本の説得にあたったとある。すでに四十七歳だという木本の言葉から、どうやら上海で印刷所を開業するらしいと知る。それから、条件交渉だ。まだ決定していないのなら、やめるのがよい。もし着手しており機械などを購入しているのなら商務で引受けてもいい。組織ができていけるのなら、相談しよう、競争はしたくないなど〔張元濟2001:179〕。木本は商務印書館の指導者たちから、それくらい重要視されていたことがわかる。11月25日、張元濟ら指導者たちは相談して小平、木本ふたりの待遇改善について相談した。給料を上げて引き留めようというつもりだ。しかし、ふたりの辞意は固かった〔張元濟2001:187〕。11月27日には、引き留められないのであれば、せめて顧問に、と張元濟は記録している〔張元濟2001:188〕。木本と小平の

ふたりは、商務印書館にとってはなくてはならないほど有能だったということだ。

1917年4月9日、木本と小平の新しい工場が開業した。張元済は、祝いにでかけている〔張元済2001:271〕すなわち上に見える上海印刷株式会社である。

『張元済日記』を資料のひとつとして『張元済年譜』が編纂された。こちらの年譜には不思議なことに、木本がふたりいる。木本毅と木本勝太郎だ。日記には「木本(君)」としか記録されていないが、文脈から勝太郎と理解してかまわないと私は思う。ところが、年譜では、なぜだか木本毅とする箇所がある。上に紹介した張元済ら3人が木本に留まるように説得したのは、年譜では11月5日のことにして、次のように書く。「もと金港堂日本籍職員の木本毅(色彩印刷を管理)が辞職するつもりだというので、氏(注:張元済)および高鳳池(翰卿)と鮑咸昌は、夕食に誘って引き留めた」〔張樹年1991:130〕

年譜にある木本毅は勝太郎の間違いではないかと疑う。

2 長尾楨太郎(1864.9.18-1942.4.1)

東京帝国大学文科大学卒業。学習院教師、文部省専門学務局勤務、東京美術学校教授兼務、第五高等学校教授、東京高等師範学校教授などを歴任している。1901年6月、東京の華族会館で東亜同文会明治三十四年春大会が開かれた。会長は近衛篤磨である。この会合に原亮三郎とともに参加していることがわかった〔東亜1988:333〕。東京高等師範学校の教授だから、書肆金港堂の社主である原亮三郎とも面識はあったかもしれない。そののち、上海に移住することになるとは、この時点で、長尾は思いもしなかっただろう。

1903年、上海に移住し商務印書館編訳人となる。給料は200元だった〔朱蔚伯1981:147〕。前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前がある。肩書きは商務印書館だ〔東亜1988:471〕。金港堂と商務印書館の合併契約が解消されたのち、1914年、帰国。長尾が家族を連れてなぜ上海に移住したのかについては、私はすでに明らかにした。

3 篠崎都香佐

上海の篠崎医院院長。遠山景直『上海』に病院の広告が掲載されているので紹介しよう。

「明治三十三年二月上海日本居留官紳ノ招聘ニ応ジ着任爾来外来診察所及病院ヲ開設セリノ上海西華徳路(電話七四五)ノ篠崎病院診察所ノ上海北四川路(電話架設中)ノ篠崎病院ノ庭園中種々ノ運動遊戯ノ設備アリノ院長篠崎都香佐ノ医員北村久

男」[遠山1907:乙4]。

明治33年とは1900年のこと。また、同書の別のページには「医師 虹口西華徳路11 篠崎都香佐」と書かれている[遠山1907:401]。『上海指南』第4巻16才によると、その所在地は、美租界西華徳路11号と表記される[商務印書館1909]。同書増訂9版(1916.10)には「篠崎都香佐(内外)蓬路三元宮後」[商務印書館1916]と掲載されているのを見ると移転をしたらしい。

東亜同文書院名誉会員名簿に、その名前を見ることができる[松岡ら1908:5]。また、前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿にも掲載されている[東亜1988:471]。名簿には上海に居住していた有力日本人が名前をつらねているから、後援会的役割をになっていたかとも思う。

1936年5月5日、山本条太郎翁追憶座談会に篠崎都香佐が出席している。肩書きは「元上海医師会会長、医師」だ。当日の会合は、山本の上海時代における旧知を集めたものだった。篠崎のほかにも、本稿に関係する数人の名前が連なっている。

篠崎の発言を採取しておこう。「私は色々親切に御世話にはなりましたが、山本さんの上海時代には余り接する機会がなかつたので、具体的に申上げる材料を持ち合はしてゐませぬ。最近の東京に来てからの話ならばありますが……」[原1936:693]。「私はさつき何にも申上げることはないと言つたが皆さんのお話を聞いて居る内に一寸想出したことがあります。私が上海に居りました時に山本さんは会社の二階にお出になりましたが初めは馬車も貧弱なものであつた。しかし郵船会社支店長が林民雄さんになられた頃からフランスタンの宏壮な家にお入りになり馬車も頗る立派なものになつた。それから私は身幅が広い様な気がした。さつき兜町で駆出すと云ふ話がありましたが、私はどうして市場の動きが敏活に山本さんには分るのかと云ふたことを訊ねたことがあります。「うん、それは分る、頭にピンと来る、それを其儘にやる。間違ふこともある」と言はれました」[同上:711]。

1939年、篠崎医院の所在地は文路200号であるが、篠崎都香佐の名前は記載されていない[金風社1939:377]

4 小平 元

小平については、汪家熔の説明があった。「紙購入の責任者だった。中国側から尊重され、日本資本が引き揚げたあとも彼は引き続き奉職した。後に自分で仕事をはじめてようやく商務を離れたという」。稲岡の注釈を見ると、元金港堂勤務で、のちに商務印書館の印刷を担当したことになっている。商務印書館の株を所有する

くらいだから有力な社員だった。

前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前がある〔東亜1988:472〕。肩書きは「商務印書館」だ。商務印書館の日本人は、彼のほかに長尾楨太郎、木本勝三郎、加藤駒治〔二〕^{ママ}らが掲載されている。彼らは、少なくとも1910年には、上海に居たことがわかるのだ。

黄光域『近代中国専名翻訳詞典』に小平の名前がある。「Kodaira, Hajime 小平元 日本商人, 1906年前来華」〔黄光域200:550〕。小平は、1905年の商務印書館増資に依じているから、1906年以前に中国に来ているというのは、それで正しい。

小平は、金港堂と商務印書館の合弁解消後もそのまま上海にとどまった。木本とふたりで1917年に開業したのが、上海印刷株式会社である。各種製版印刷、製本印刷用紙および諸材料インキ販売業だと説明してある。その取締役社長が小平元（北海道）だ〔金風社1939:336〕。該会社は、1939年の時点で上海に存在していたことがわかる。その時の社長が小平で、木本の名前が見えない。ゆえに、木本をついで社長になったのだらうと考えた。

5 原田民治

王国維に日本語を教えたという。詳細は不明。『農学報』と『教育世界』の目次を見てみたが、該当者を探し当てることはできなかった。また、汪向荣著、竹内実監訳『清国お雇い日本人』（朝日新聞社1991.7.5）、および劉建雲『中国人の日本語学習史 清末の東文学堂』（学術出版社2005.11.25）にも原田の名前はない。

6 神崎正助

三井物産社員。上海支店勤務をしたことがある。前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に三井洋行の所属で名前がでている〔東亜1988:473〕。1936年5月5日、山本条太郎翁追憶座談会に出席した。肩書きは「山東鉱業株式会社取締役」だ。発言したらしいが、記録には採録されていない。伊地知虎彦の発言箇所ですぐに「神崎さんの陳べられた三つの特長」とあるだけ。ウェブ上の早稲田大学写真データベースB24-14「憲政会名士来滬記念」に上海南京路居仁里朱篠芳妓館で撮影したものが保存されている。場所からして、これは上海時代のもの。

7 尾中満吾（1881.11.23-1914.7.22）

原資料には「華南記」と注がついているらしい。「記」は屋号によく見られる。華南記は企業名だらうと推測した。だが、それだけでは前にすすまない。

香川政一著『華南双英』（華南図書館1935.12.15。扉は「華南の双英」）を入手してよ

うやくその人の経歴がわかった。

尾中満吾は、山口の人。兄に郁太（号鶴洲）、周一、諦治がいる。その尾中諦治は、1904年旅順港攻撃の際、戦死した。兄諦治とともに華南小学校の出身である。「華南双英」とは、兄弟ふたりを2輪の花にたとえて香川政一が名付けたものだ。華南というのは中国のそれではなく、華南小学校（今の防府市立中関小学校）であった。また、満吾は、尾中華南とも号している。

山口中学から長府へ転校、そこの河村家を後に継いだ（1912）。ゆえに河村満吾ともいう。台湾協会学校（今の拓殖大学）卒業後、沖電気商会に勤務しながら実業電気学を学ぶ。1906年、沖電気商会から北京に派遣され、同年、上海の三井洋行（三井物産上海支店）に入った。仕事の内容は、「電気用品の販売並に技術のことを担任するの外に、三井洋行専売の新田帯皮販路拡張に渾身の精力を傾注することゝなつた。三井洋行は中清一帯に次第に対清貿易の拡張に連れ、電気事業に経験を有する君を特に労する必要があつた」（125-126頁）

ベルト販売について知人の山縣純輔がつぎのように述べている。三井物産との関係があるので引用する（ベルトにつけられた傍線は省略）。

「当時我国のベルトは未だ上海市場に於て信用を博する不能、外国品の独専する処と相成候、三井に於てベルトの担当たる君は、煙筒の有る処は西洋人の会社たると支那人の会社たるとを不問、一々ベルトの見本を以て商品の売込に着手せられ、北京語の不通なる上海にては筆談にて商取引をなし、本邦ベルトの今日の如き盛大なる販路を開きたるは、一に君の尽力の働す処に御座候、始めこれが販売に関しては、当時の三井の主任高橋氏と意見の衝突より三井を辞せられたるも、三井は其辞表を見て大に驚き辞を低くして例へ会社を去ると雖もベルトの販売のみは是非願ひたしと依頼し来りたるは、如何に其手腕に依頼せしか知れ申候」（152頁）

尾中が三井物産上海支店で働いたのは、せいぜいが3年間ほどの期間だった。「輸入課主任丹羽氏漢口支店長に榮転するに及び、君偶々後任者と意見を異にし断然三井を辞して、独立して一行を開くことになつたのは明治四十二年九月である」（126頁）

ここに見える丹羽とは、本稿に登場している「11丹羽義次」である。1909年、尾中は上海狄思威路華南洋行を設立した。その業務は、「電気機械各種販売並に工事請負、紡績織布並に各種工場用品類一切を取扱ふ」（127頁）ものだった。

該書に収録された前原謙治「隠れたる亡き偉人河村満吾君を偲びて」を紹介しよ

う。上海での活躍を称賛して次のように書いている。

「君は華南洋行創立以来全然支那人と取引した。在留邦人など丸で眼中に置いてなかつた。従つて華南洋行の真価は在留一万五千の邦人には殆ど知られて居ない。併も事実上「シーメンス」三井などと相並んで取引したなどは、到底成金志願の虚業家輩の企及し得る処でない」(77頁)

三井物産上海支店を辞めて、ひとりではじめて華南洋行をいかに隆盛にみちびいたか。これが、なんとも強引ともいえるやり方だった。

「如何に天才的実業家と云へ、ホンの無資本より僅々数年の間に、殊に百人中一人の成功者すら出し難いとされてる上海で、到底華南洋行今日の隆盛の得らるべき道理がないとは何人にも起り来る。疑問であらねばならぬ。併し事實は絶対に事實だから致方がない。君は徹頭徹尾令兄からも何等の援助を受けてない。実に君は其の資本を信用借りで支那人から引き出したのであつた」(77-78頁)

無資本ではじめて「信用借り」で切り開いたというのだ。物を動かす仕事だから資本よりも人間関係が重要だということか。「信用借り」の内容をもう少し聞いてみる。

「今君の実話を紹介するが、人名等多少記憶に洩れた点のあるのは遺憾だが……君が断乎袂を払つて三井を辞した時に、君には十二分の胸算があつた。君は三井にある内に、いつとはなしに土地の支那富豪某甲及某乙と親密に交際を^{ママ}してつた。取引上(三井の一員として)君の律儀に感じて、彼より来つて君に許したのであつた。愈々独立するや君は直ちに甲の許に走つて、立談の間無証文で借用期限を二ヶ月として即座に五百金を引き出した。其の返済期限の数日前、今度君は乙を訪うた。そして同様に五百金を引出し、其の足にて之を甲に返済し、厚く礼を述べた。この確実なる返済は甲をして愈々益々君を信ぜしめた。爾後数回に亘りて此の巧妙なる支那富豪との折衝は繰返された。五百は八百に、八百は千……或は遞加し或は遞減した。君は確実な銀主を得たのであつた。斯くてこの天才的実業家の営業する華南洋行は隆々の勢で発展した」(78頁)

これが尾中満吾のやり方であつたようだ。どうしても「強引」という言葉を使いたくなる。だが、丹羽との例に見るように、性格のあう人間にはいい人のようだった。だからこそ、名前を並べて商務印書館の株を所有している。

一覧表をみると、尾中は、1905年の増資時には商務印書館株を持たなかつた。当然だ。尾中が三井物産に入るのは1906年のことだからだ。その後を持つことになっ

たとわかる。

1914年、商務印書館が日本人の持株を回収しおわってから、尾中は上海に病死した。

8 原亮一郎

金港堂社長。原亮三郎の長男。1907、08年に商務印書館の理事 [梁長洲2004c:35]。

9 原亮三郎 (1848-1919)

金港堂創業者。1903年、加藤駒二、小谷重をともない上海を訪問し商務印書館と合弁の契約を結ぶ。1903、05、06年に商務印書館の理事 [梁長洲2004b:9] [梁長洲2004c:35]。妻は礼子、11男6女の子供にめぐまれる。原亮三郎について、私は詳しく書いた。

10 山本条太郎 (1867.10.11-1936.3.25)

三井物産社員。1898年原亮三郎の三女操と結婚。1901-05年、三井物産上海支店長。1907、08年に商務印書館の理事 [梁長洲2004c:35]。1908年本店勤務になるまで上海に居住する。

山本条太郎こそ、金港堂と商務印書館を結びつけた人物だ。彼についても、詳述した。くりかえす必要もなく、原亮三郎 - 山本条太郎 - 印錫璋 - 夏瑞芳という人間のつながりがあったことが、両社合弁の決定的要因である。

日本人が中国の会社に投資をするという行為は、単に金儲けだけが目的だ、と考えると判断を誤ることになる。少なくとも金港堂と商務印書館のばあいが、そうだ。合弁を解消した時、最終的に日本人株主は利益を手にした。これは事実だ。しかし、同時に、商務印書館に所属する中国人株主の所有株も同額に評価されたという事実を見逃してはならない。日本人株主の1.8倍もの利益を中国人株主は得たことも書かなければ、不公平だといわれてもしかたがなかりう。

合弁解消後も、張元済たちと山本の交流は続いていた。たとえば、中華書局との合弁話にまつわって次のような事がある。

中華書局は、中華民国成立後、商務印書館からとびだした陸費達たちによって設立された強力な競争者である。それが、1917年頃業績が悪くなり、古巣の商務印書館へ売却、連合するという話がもちあがった。中華書局側から交渉に出てきたのがチャーリー宋である。商務印書館の内部では、張元済が買収に賛成し、鄭孝胥が反対した。あくる1918年2月8日のことだ。張元済、高夢旦、鮑咸昌が主人となって、山本、小平、木本を一品香に招待した。そこで鮑咸昌が、中華書局買収について山

本に意見を求めたという。山本は答えて「買収するのはよくない。一に、書業を独占するとますます人に嫌われる。二に仕事をするのに敵がいなければ必ず傲慢になる。傲慢は最大の病だ。また、あそこは自滅するから、うち破ることもない」と [張樹年1991:149][張元濟2001:475] 山本のいった自滅云々の箇所は、はずれた。しかし、やみくもに競争者をうち破るのはよくない、と山本が考えていたことは記録する価値のあるものだ。

彼は、のち三井物産株式会社常務取締役となった。日本火薬製造株式会社、満洲製麻株式会社など多数の会社を創立。衆議院議員。南満洲鉄道株式会社社長、貴族院議員などを歴任した。

11 丹羽義次

三井物産社員。上海支店に勤務したことがある。前出『華南双英』に「(序) 故河村満吾君を懐ふ」を書いている。「余が君を識りしは君が北京から上海の三井に転じられた時で、今から十年前の事と記憶する。君は腕の人であつて理論の人でなく、空論を排して実行の人で有つた。或日余に向つて三井を辞し独立して上海に於て電気に関する商業を經營したいとの相談を受けたが、余は日常君の性行を知るを以て其拳に賛成し、……」とのべる。三井物産上海支店から漢口支店長に栄転したことは、尾中満吾のところですでに触れた。

1936年5月5日、山本条太郎翁追憶座談会に出席している。肩書きは「大正海上火災保険株式会社取締役」である。上海支店当時の思い出を紹介する。「当時支那で穴銭銅貨を日本の一銭銅貨の様なものに改鑄すると云ふ問題があつて、盛んに外国から銅を輸入するので、其銅の輸入仕事を私がやらされた。そして豪洲、ヨーロッパ、アメリカ、日本等から買込んで支那に入れる仕事を山本さんの指図に依つて三井は如何なる外国の輸入商にも立ち優つた結果を挙げ得たのであります」[原1936:694]

12 鈴木島吉

横浜正金銀行上海支店に勤務したという。前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前がある [東亜1988:471]、『中外商業新報』(1918.4.7付)では、横浜正金銀行重役だ。前出『近代中国専名翻訳詞典』には、つぎのように記述される。「Suzuki, Shimakichi(1866-) 鈴木島吉 日本銀行家, 1900年前後來華」[黄光域200:669]

13 伊地知虎彦

三井物産社員。山本条太郎の部下。1936年5月5日、山本条太郎翁追憶座談会に出席している。肩書きは「液化炭酸株式会社社長」だ。上海時代の山本を回想する。「山本さんはあらゆる方面に特長を發揮されましたが、就中人を鞭撻して働かせることに特に妙を得て居られたと私は考へるのです。何時も山本さんにお小言を頂戴すると何糞と云ふ気になつて仕事をやる。其内に興味が出て来るといつた塩梅で、いくら目玉が飛出る様にお小言を頂戴しても却つて愉快地仕事をすることが出来た。つまり緊張して仕事をやる、斯う云ふご指導振が実に手に入つて居つたのであります。さればこそ上海支店の成績がアノやうに挙つたのだと思ひます」と発言している[原1936:706-707]。伊地知自身について説明しているわけではないが、上海で働いていたということはわかる。

14 益田太郎

三井物産関係者で益田といえば、益田孝にきまっている。その次男が、太郎だ。益田太郎(1875.9.25-1953.5.18)元貴族院議員、男爵。台湾精糖社長など。三井物産の元社長益田孝の次男。太郎冠者の筆名で多くの喜劇、流行歌を作った。

だから上の名簿に見える益田太郎は、三井物産との関係からいえば益田孝の次男太郎であつてもおかしくはない。上海に行ったことはなかったようだが、投資だけならば可能だろう。ただし、高野正雄『喜劇の殿様 益田太郎冠者伝』(角川書店2002.6.6)には、商務印書館についての言及はない。また、益田タマの名前もでてこない。太郎冠者と同姓同名の別人かもしれない。

前出『近代中国専名翻訳詞典』に収録している人物は、必ずしも中国に関係しているとは限らない。だが、益田太郎を掲げて「日本人, 工商界」とある[黄光域200:584]。参考までにつけくわえる。

15 益田タマ

不詳。汪家焔は、玉、タタ、タマと表記する。

益田太郎の父は孝、母は栄子だ。長男の象(きさし)は、生後まもなく病死したという。孝の愛妾は「たき」で、その子は信世(のぶよ)。太郎の妻は貞(のち、貞子)。その愛妾は、「ことり」(岩崎登里)という。太郎と貞の間には、克信、孝信、義信、智信、信子、智恵子、貞信の子らがいる。だが、益田タマは、どこにも出てこない。

1907年の「上海在留日本人営業案内」にあげられた多くの業種(量職、人力車製造及修繕業、三味線まである)と氏名のなかに、益田姓はひとりしかいない。旅人宿

の「英界広東路八 番菜館 益田モト」というのがそうだ [遠山1907:406]。モトとタマは異なる。違うが、ほかに手がかりがまったくないので触れておく。

16 山口俊太郎

実業家というが、具体的な事業内容は不明。

原安三郎が山本条太郎夫人操の13回忌にあたり追悼集を編纂発行している。『山本操夫人乃おもかげ』という。これに収録された集合写真のなかに山口も写っている。原亮三郎の娘操の妹幹尾が山口の夫人である [原1966:57]。

17 利見合名会社

「大阪で教具の製造販売」だという。これを見たとき、大阪の会社が、なぜ上海の商務印書館に投資するのか不思議な気がした。投資者のなかで、これだけが会社であるのも、ほかが個人株主だからよけいに目立つ。合名会社というのは、社員全員が会社の債務について共同で無限責任を負う。いってみれば社長と社員の区別がない、あるいは、全員が社長という組織形態である。小規模だから家族企業的ということもできる。

2006年1月、あるウェブサイトにおいて競売品のひとつとして手作りのそろばんが出品してあることを教えてもらった。掲げられた写真に「利見合名会社(大阪市唐物町二、東京大伝馬町)」という菱形の紙が貼られているのが見える。そろばんなどを製造する会社で、東京と大阪に店を持っていたことがわかる。利見合名会社の誰かが、三井物産か金港堂の関係者と知り合いなのかと想像する。そろばんだから、学校教育と関係が深い。それならば教科書の金港堂と結びつくかもしれない。社長がその誰かだろうが、氏名もわからなければ、投資の経緯も、詳細は今のところわかっていない。

以上、汪家熔が提出した日本人投資者について、すこしばかり補充をした。

以下の人々は、上の投資者名簿には出てこない。しかし、商務印書館とかかわりがあるので簡単に説明しておきたい。番号は、筆者がつけた。

18 田辺輝雄

三井物産社員。山本条太郎が上海三井支店長をつとめていた時代の部下である。彼自身が当時を回想して、「嘗て上海三井支店長として勤務せられた頃、自分も常に大人に咫尺し、其下に親しむものが多かつた」[原1936:275]と書いている。

汪家熔論文B1、B2によると、田辺は商務印書館監査役理事だったことがある。1905年の臨時株主会記録に見える [梁長洲2004b:9]。三井物産上海支店の勤務と兼ね

ていたらしい。のち、『京城日報』(1917.8.31付)に朝鮮紡織会社調査委員の肩書きで田辺の名前がある。前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前が見える〔東亜1988:473〕。所属は、上海紗廠だ。1939年、日華紡織株式会社取締役社長〔金風社1939:50〕、および、上海日本商工会議所顧問〔同上:323〕となっている。

前出『近代中国専名翻訳詞典』には、「日本商人，1921年前後來華」とある〔黄光域200:674〕。中国に來た時期が一致しない。

19 藤瀬政次郎

三井物産社員。山本条太郎のあとをついで三井物産上海支店長になった。前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前がある〔東亜1988:471〕。商務印書館と金港堂の合併解約書に保証人として署名している。

前出『山本操夫人乃おもかげ』に文章を寄せた藤瀬英二郎について、以下の注がついている。「元三井物産株式会社上海支店長、後に同社常務取締役等を歴任した藤瀬政次郎氏(亡)の次男、現ジェット口理事」〔原1966:221〕

20 加藤駒二

金港堂総務部長、帝国書籍株式会社取締役。商務印書館の株主でもあった。給料は200元〔朱蔚伯1981:147〕。1903、05、06年に商務印書館の理事〔梁長洲2004b:9〕〔梁長洲2004c:35〕。加藤の持株は、益田太郎、益田タマに譲渡した可能性があることを汪家焜はいつたことがある。前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に商務印書館加藤駒^マ治で掲載される〔東亜1988:472〕。

21 小谷 重

帝国大学文学士、元文部省図書審査官、図書課長。金港堂編輯部長。原亮三郎の依頼で商務印書館の役員として上海に移住したことがある。

22 福間甲松

商務印書館との合併を解約するにあたり、金港堂から上海に送り込まれた人物が福間甲松である。金港堂を代表しているから、合併解約書には、商務印書館を代表した夏瑞芳とならんで署名をした。

『日本紳士録』第17版(交詢社1912.12.28)の「東京の部」565頁にその名前がある(同上第16版(明治44.12.25)には福間の名前は見えない)。

福間甲松 金港堂書籍株式会社取締役、日本硫黄株式会社監査役、赤坂区新坂町四三

金港堂に勤務していたことがわかる。ただし、それだけではなかった。

山本条太郎が中心になって対中国投資会社を創立していた。旭公司という。中国の鉱山調査と開発が目的である。のちの中日実業株式会社につながっていく。この旭公司について、高木睦郎は、つぎのように証言している。

「……これより先き、山本翁と藤瀬政次郎氏とが、旭公司といふのを創立して、福間甲松氏を上海の主任に、北京に上仲尚明、漢口に丸岩、東京に尾崎敬義氏等を置き、主として支那の鉱山調査を行ひ、併せて他の事業にも投資した」[山本1942:283]

前出『山本操夫人乃おもかげ』に掲げられた平原初音「行き届いた慈愛」には、著者を説明してつぎのように書いている。

福間甲松氏(亡)(山本家の事業代表で若くして永眠)の夫人、現在福間甲松氏(亡)長男の養家平原家に再婚 [原1966:189]

福間甲松は「山本家の事業代表」だということだ。そうなると、金港堂と山本条太郎の関係者は、自由に行き来のできる状態であつたらしい。ならば、原亮三郎と山本条太郎の関係からいって、ふたりを取り巻いてその知人たちは、ひとつの共同体を形成していたということができるかもしれない。金港堂グループなのである。

23 三木甚市

1914年の商務印書館と金港堂の合弁解約書に名前が見える。

見 議 三木甚市*2 印

三木は、東亜同文書院第3期(1906年6月)の政治科卒業生で、後に上海同文書院助教授になった [松岡ら1908:26]。また、大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史』(滬友会1982.5.30非売品)の「第3期銘々伝」にも「三木甚市(徳島)は母校の助教授となり」(411頁)とだけ書いてある。同じ上海に住んでいたとはいえ、東亜同文書院助教授の三木がなぜ合弁解約書に出てくるのか。ここだけを見てもわからない。ところが、前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前があるのだ [東亜1988:472]。しかも、その肩書きは福岡法律事務所と変化している。三木

は、東亜同文書院をやめたあと福岡法律事務所に勤務しているとわかる。ならば、商務印書館と金港堂の合併解約書に名前がでてきてもおかしくはない。

4 結 論

合併当初を振り返ってみる。1903年に金港堂が投資したのは10万元だった。1株 = 100円で計算すれば、1,000株ということになる。

その割合で見ていくと、1905年が1,500株、1906年が1,800株、1907-1912年は2,520株のままで、1913年に最終的持ち株が3,781株である。合併解消を予定していた時に、急に日本人投資者を認めるとも思えない。1907-1913年の期間に増資したらしいのだが、その詳細はわからない。

最初の2、3年、すなわち1905年までは、商務印書館と金港堂の持株は平等に同数であった。ところが、1906年以後は、商務印書館側の経営方針に変換が生じる。つまり、日本人の投資を抑制しはじめる。その後、中国側のみが増資をくりかえしたのである。

経営方針の変換は、理事名簿にもはっきり表われている。1903年の理事は、夏瑞芳、原亮三郎、加藤駒二、印錫璋だった。中国2人、日本2人で平等だ。1905年は、序列がかわっただけで同じ人々である。すなわち、夏瑞芳、原亮三郎、印錫璋、加藤駒二となる。さらに、1908年では、夏瑞芳、原亮一郎、張元済、印錫璋、山本条太郎にかわる。中国3人、日本2人である。日本人理事が就任するのは、ここまで。翌1909年からは、日本人理事を排除しすべての理事が中国人となる。

合併解消時に、日本人持株は、それでも3,781株に増えていた。だが、一方の商務印書館側は、8,219株であり、日本人株の約2.2倍なのである*3。

日本人投資者の一部には、まだ不明の部分を残している。

判明している日本人投資者を見れば、そのほとんどは金港堂の原亮三郎とその娘婿山本条太郎を中心とした人的関係者ばかりであることがわかる。日本人株主の多くは上海に生活をしてきた。だが、必ずしも上海に長期滞在している必要はなかったのではないか。原亮三郎は、合併契約時のみ上海を訪問しただけだ。また、山本条太郎も日本に引き揚げたが、最後まで株主でありつづけた。

山本は三井物産の社員ではあったが、三井物産そのものからの投資を誘ってはいない。あくまでも面識のある自分の関係者を商務印書館への投資に紹介したと推測

できる。私にいわせれば、まさに日本の金港堂グループの持ち株なのである。

次に「商務印書館の日本籍投資者名簿」を掲げて本稿の終わりとする。

商務印書館の日本籍投資者名簿

	1905	1905	*4 1914	備 考
1 木本勝太郎	×		135株	元金港堂。商務印書館勤務
2 長尾楨太郎	×		45株	元高等師範教授。商務印書館編訳人
3 篠崎都香佐		×	88株	上海篠崎医院院長
4 小平 元	×		60株	元金港堂。商務印書館。上海印刷株式会社取締役社長
5 原田 民治	×		13株	王国維に日本語を教えた
6 神崎 正助		×	30株	三井物産上海支店勤務
7 尾中 満吾	×	×	22株	三井物産上海支店勤務。華南洋行を創設
8 原 亮一郎		×	515株	金港堂社長。原亮三郎の長男。最初の投資者
9 原 亮三郎	×	×	1,055株	金港堂創業者。最初の投資者
10 山本条太郎	×	×	764株	三井物産。原亮三郎の女婿。最初の投資者
11 丹羽 義次		×	45株	三井物産上海支店勤務。大正海上火災保険株式会社取締役
12 鈴木 島吉		×	80株	横浜正金銀行上海支店勤務。のち重役
13 伊地知虎彦		×	15株	三井物産上海支店勤務。液化炭酸株式会社社長
14 益田 太郎		×	329株	不詳。益田太郎冠者か？
15 益田 タマ		×	167株	不詳。汪家熔は、玉、タタ、タマと表記する
16 山口俊太郎		×	383株	実業家。原亮三郎の女婿
17 利見合名会社		×	35株	東京大阪で教育器具の製造販売
合 計			3,781株	
18 田辺 輝雄	×		×	商務印書館監査役理事。朝鮮紡織会社

			調査委員。日華紡織株式会社取締役社長。上海日本商工会議所	
19	藤瀬政次郎	x	x	三井物産上海支店長。合併解約書に保証人として署名する
20	加藤 駒二			金港堂。商務印書館
21	小谷 重			元文部省。金港堂。商務印書館
22	福間 甲松			金港堂。合併解約書に署名。山本家事業代表。旭公司
23	三木 甚市			東亜同文書院。福岡法律事務所。合併解約書に署名

閉

【引用文献】中国語音ABC順

- 黄 光域2001 『近代中国専名翻訳詞典』成都・四川人民出版社2001.12
- 東亜文化研究所1988 『東亜同文会史』財団法人霞山会1988.2.1
- 金 風 社1939 『支那在留邦人人名録』中支版 上海・金風社1939.9.10第29版
- 梁 長洲2004b 「商務印書館股東会記録(選)」宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3卷 武漢・湖北教育出版社2004.10
- 2004c 「商務印書館歴届董事名録」 同 上
- 山本条太郎1942 『山本条太郎伝記』山本条太郎翁伝記編纂会、発行者：原安三郎 1942.3.25
- 商務印書館1909 『上海指南』上海・商務印書館 宣統元年(1909)五月初版/七月再版
- 1916 『上海指南』上海・商務印書館1916.10増訂9版
- 松岡恭一ら1908 「東亜同文書院学友会會員名簿」松岡恭一、山口昇編(東亜同文書院)『沿革史』上海・東亜同文書院学友会1908.6.20
- 汪 家熔2004 宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3卷 武漢・湖北教育出版社2004.10
- 香川政一1935 『華南双英』香川政一編「磯崎拾玉」前篇 華南図書館1935.12.15非売品

- 原安三郎1936 『山本条太郎翁追憶録』1936.9.5非売品
1966 編纂『山本操夫人乃おもかげ』1966.9.5非売品
- 遠山景直1907 『上海』出版社名不記1907.2.28
- 沢本郁馬2004 「商務印書館と金港堂の合併解約書」『清末小説』第27号2004.12.1
(実際は8月22日には発行している)
- 張 樹年1991 張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元濟年譜』北京・商務印書館1991.12
- 張 元濟2001 『張元濟日記』上下 張人鳳整理 石家莊・河北教育出版社2001.1
- 朱 蔚伯1981 「商務印書館是怎样創辦起来的」『文化史料(叢刊)』第2輯1981.11

【注】

- 1) 出資者の人数については、つぎの文章を参照すること。樽本『初期商務印書館研究(増補版)』19-20頁。また、『中国出版史料・近代部分』第3巻(武漢・湖北教育出版社2004.10)に収録した高鳳池「本館創業史」の注2において、郁厚坤の息子郁為瑾が7名であると1988年の手紙で書いている、とある(60頁)。
- 2) 『中国出版史料・近代部分』は、「見証」「三本条太郎」と誤る[汪家熔2004:41]。また、三木是市[沢本2004:125]とするのも誤り。
- 3) 日本人が獲得した利益について、汪家熔はふたつの数字を提出している。ひとつは、論文B1の「表2 投資収益表」、同論文B2では「表2 原始投資収益表」というのがそれだ。だが、前者では、全部の金額が1桁少ない(B2で訂正されている)。もうひとつ出しているのは、株の利益率が異なっているからややこしい。すなわち、以下の論文だ。

汪家熔「主權在我的合資 一九〇三年～一九一三年商務印書館的中日合資」『出版史料』1993年第2期(総第32期) 1993.7 / 『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』1998所収 / 『中国出版史料・近代部分』第3巻2004所収

問題の一覧表は、「商務印書館日股投資和獲利表」という。雑誌初出の1906年の金額に「約」をつけているが、のちにはそれを外している。それ以外にも初出の数字とは違っているのはなぜなのか。会計の数字違いは論文としては致命的だ。わずらわしいとは思うが下に示す(数字が異なる箇所のみ。初出 後出

の順。位取りのコンマをつけないのは初出のまま)。

年份	総資本	日方股本
1906	403500元 40万元	約180000元 18万元
1907		252000元 25万元
1908		252000元 25万元
1909	759500元 76万元	252000元 25万元
1910	787400元 79万元	252000元 25万元
1911	796500元 80万元	252000元 25万元
1912	797000元 80万元	252000元 25万元
1913		378100元 38万元

基本となる数字を概数化した結果、不都合が発生する。すなわち、日本の持株に株利息率を乗じると不正確な数字しか得られない。たとえば、1907年の日本持株は252,000元だ。この年の株利息率は20%だから50,400元になる。しかし、概数化した25万元に株利息率20%をかけると5万元にしかない。以下同様に汪家熔が一覧表で示す数字と一致しなくなるのだ。検証しようとする利用者はとまどうだろう。

もうひとつ私が問題だと考えるのは、日本側だけの獲得利益を示していることだ。論文の主題が、いくら日本人投資者の利益を問題にしているとはいっても、不公平にちがいない。一方の商務印書館の獲得利益をも明らかにしてこそ、一覧表の意味がある。私は、そう考えて公平な一覧表を作り直した。「商務印書館と日本の獲得利益」という(樽本「変化しつつある商務印書館研究の現在」または、商務印書館の被害者意識)『大阪経大論集』第46巻第3号(通巻227号)1995.9.15。のち『初期商務印書館研究』清末小説研究会2000.9.9、および同書増補版2004.5.1所収)。その結果、判明した事実がある。資本金が増加しているのだから当然のことながら、全体として商務印書館は、金港堂に比較して約1.8倍にのぼる利益を獲得している。なるほど、汪家熔は、この事実を明らかにしたくなかったらしい。だからこそ、彼は、私の作り直した一覧表を一貫して無視した。「主権が商務印書館にあった合併だ」と主張する汪家熔が、金港堂を大きくうまわめる商務印書館の獲得利益を隠そうとするのだ。矛盾である。

汪家熔は、自分で提出した不公平かつ不正確な数字を『中国出版史料・近代部分』第3巻に収録した。中国では、これが今後、利用されることになるだろ

う。研究にとっては残念なことだった。つけくわえれば、日本側が得た利益に8万元を加えるのは正しくない。それについても知らん顔をしているのは、いかなものか。

- 4) 1905年二月に2度増資した [汪家燦1991]。1906年の可能性があるが、このままにしておく。

(たるもと てるお)

『清末小説から』第82号 2006.7.1

美華書館名称考(2).....樽本照雄
商務印書館の火災(3完)...沢本香子
晩清小説作者掃描(柒)...武 禧
アディソンの漢訳小説.....神田一三
『新編増補清末民初小説目録』の『小説海』掲載作品正誤・再補
.....杜 筆恩
漢訳アラビアン・ナイト(16)
.....樽本照雄

『清末小説から』第83号 2006.10.1

『繡像小説』の坂下亀太郎「理科遊戯」
.....神田一三
美華書館名称考(3完).....樽本照雄
晩清小説作者掃描(捌).....武 禧
『清末小説研究集稿』日本語前言と
後記樽本照雄

<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

『清末小説から』は、清末小説研究会のウェブサイトで公開しています